



## ～お葬儀屋さんのひとりごと～

### 提灯の歴史

提灯の歴史は古く、その起源は室町時代まで遡るといわれています。

当時中国からもたらされたとされる提灯は、竹かごに紙を張った折りたたみのできない籠（かご）提灯のようなものでした。

折りたたみの出来る提灯が使われるようになるのは室町時代末期の頃で、当時の絵巻には葬列の中の一員が提灯をぶら下げている様子が描かれており、仏具的な役割をしていたことがうかがわれます。

安土桃山時代から江戸時代はじめ頃に祭礼や戦場での大量使用が要因となって技術革新がなされ、軽くて携帯に便利な簡易型への発展を遂げました。

更に、江戸時代中期以降にロウソクが大量生産できるようになると、それまで天皇・貴族・武士・僧侶など上流階級の人々だけが使用していた提灯も安く大量に出回り、多種多様な形状の提灯が人々の生活に浸透していきました。盆供養に提灯を使う風習もこの頃浸透していきました。

この頃の提灯は、いうなれば現代の懐中電灯や室内照明具、またはネオンサインのようなもので、全国各地の都市で提灯を作っていました。



### 盆提灯の文化

お盆の期間に灯りを点し、その灯りを頼りに祖霊が戻ってくると言う考え方は、仏教が日本に入ってくる以前の、日本古来の宗教観・人生観に基を発していると思われます。

その後、仏教や中国由来の季節習慣（七夕）等の影響を受けながら、同時に収穫祭や虫送り・ねぶり流しといった民族的慣習を取り込み、現在の形になってきました。その中で祖霊の迎え・送りの役割を果たす「盆提灯」は欠くことのできない存在となっております。

九州を代表する八女提灯は、昔から八女提灯と呼ばれていたわけではなく、当時の八女市福島町で生まれたことから福島提灯と呼ばれていました。

文化年間（1813年頃）に荒巻文右衛門（あらまきぶんえもん）によって創製されたといわれる福島提灯は、場提灯（ばちょうちん）と称され人気を博していました。

安政年間（1854～1859年頃）になると、同じく福島に住む吉永太平（よしながたへい）により意匠が凝らされ、提灯の骨に使う竹を細く裂いて一本に繋げ螺旋状に巻く「一条螺旋式」を考案、典具帖紙に類似した薄紙を用いて仄か（ほのか）に内部が透けるように改良が施され、その後八女地方全域で生産されるようになったことで、福島提灯は「八女提灯」と呼ばれるに至ったのです。

### 盆提灯の飾り方

盆提灯は盆祭壇や仏壇の前に一対、二対と飾ることが基本とされていますが、スペースを確保できない場合など、対で飾ることが絶対ではありません（対で飾る方が見栄えが良くなります）。ご先祖様を敬い供養する気持ちが何よりも大切です。昨今の住宅事情もあり、「小さくても良いものを飾る」ことが一般的になりつつあります。

どちらにせよ、ご先祖様を慕い想う気持ちが何よりも大切です。ご家庭に合わせた盆提灯をお選びください。